

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】 稲山 円

【所属】（助成決定時）東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程

【研究題目】 イラン・テヘランにおける女性の宗教実践とジェンダー

【研究の目的】

イランを含め、中東地域を中心とするイスラーム社会における宗教実践に関するこれまでの研究は、男性の宗教実践に関するものを中心とし、女性の宗教実践は十分に研究されてこなかったのが現状である。

またイランやイスラーム社会のジェンダーに関する従来の研究は、宗教テキストの分析、歴史的な分析、また法学的な分析など様々なものがあるが、日常生活のなかで日々生成されるジェンダーが実際にイスラームによるものなのかどうかを実証的に検証することなく、イランやイスラーム社会のジェンダー＝イスラームのジェンダーという前提に基づいているという問題点が指摘できる。

以上のような問題意識に基づき、本研究は、イランの首都・テヘランにおける現地調査によって女性の宗教実践の実態を明らかにすると共に、イラン人が日々の生活の中で頻繁に参照する様々なペルシャ語による宗教テキスト等の分析によってイスラームの教義やイランの国家イデオロギーに見られるジェンダーを明らかにし、その両者がどのような関係性にあるのかを検証することを目的とした。

【研究の内容・方法】

2010年12月2日から2011年3月24日まで、イランの首都・テヘランにおいて女性の宗教実践の実態を観察することを目的に現地調査を実施した。イランが国教とする12イマーム・シーア派の第3代イマームであるホセインの死を哀悼する様々な儀礼が、毎年イスラーム暦の第10月（ムハッラム月）1日に始まり、イマーム・ホセインが殉教した10日（アーシューラー）をピークとし、第11月（サファール月）20日までの間、国を挙げてイラン全土で行われるが、調査開始直後の12月9日にムハッラム月が始まり、2011年1月25日がサファール月20日にあたったため、この期間中は主に様々なイマーム・ホセインの哀悼儀礼の参与観察を行い、その中で女性がどのような働きをしているのかに注目した。調査を行ったテヘラン北西部のジャンナット・アーバード地区の宗教グループ（ヘイヤット）の哀悼集会（ロウゼ集会）に連日参加し、モスクで開かれる同様のロウゼ集会にも数回参加した。また、願掛け（ナズル）が叶った時に開く女性だけの宗教集会であるソフレ集会にも参加する機会を得て、主催者や参加者の女性にインタビューを行った。このソフレ集会以外にも、女性が願掛けを行う機会は多く、願が叶った時に、親族、友人、隣人らに食べ物や飲み物をふるまうということもよく行われ、その願掛けの食事を調理する機会も複数回観察することが出来た。親族らが集まって男女協力して調理が行われるが、女性が中心となり作業していた。またインタビューを行うと、女性が家族の利になることを願って願掛けを行い、願が叶った場合、女性がその家族や親族から敬意を得る契機となっていることが伺えた。

また調査の際には、帰国後に分析を行う資料を収集した。主に女性のインフォーマントに宗教的な疑問がある場合どのように解決するのか、どのような本を参考にしているのか、自宅にどのような宗教本を持っているのかを聞いたり、また書店を巡って売れている本を聞いたりして資料を購入した。

【結論・考察】

イマーム・ホセインの哀悼儀礼における女性の実践については、これまでの研究では哀悼集会（ロウゼ集会）に関するものが主であった。今回の調査では、特に家族や親族の単位で行われる願掛けの料理の調理・分配において女性が大きな役割を担っていること、女性にとっても願掛けの調理・分配が女性の重要性を高める機会となっていることが観察できた。また、この願掛け（ナズル）という行為が、シーア派信徒の信仰生活の指針の書である『諸問題の解説』においては、「夫の許可のない妻の願掛け（ナズル）は無効である」（問題 2644）とされているが、実際には夫に許可を取ることなく願掛けを行っている事例が大多数であり、イスラームの規定と実態との齟齬、また比較的自由に願掛けを行うと同時に、願掛けという行為を通して高い自立性と自由を獲得する女性の姿も明らかとなった。

資料の分析は現在継続中であるが、以上のように、テキストにおけるイスラームの規定とは異なる事例は数多く、従来の研究におけるイランのジェンダー＝イスラームのジェンダーという構図は必ずしも正しくないのではないかと考えられる。

